

笑う唾女

夢野久作

青空文庫

「キキキ……ケケケケケエ……キキキキツ」

形容の出来ない奇妙な声が、突然に聞こえて来たので、座敷中皆シンとなった。

それはこの上もない芽出度めでたい座敷であつた。

甘川あまかわ家の奥座敷。十畳と十二畳続きの広間に紋付袴もんつきはかまの大勢

のお客が、酒を飲んでワイワイ云つていた。奇妙な謡曲うたを謡う者、流行節を唄い唄い座つたまま躍り出しているもの……不安とか、不吉とかいふ影のミジンも映さしていない、醇じゆんぼく朴ぼくそのもののよ
うな田舎いなかの人々の集まりであつた。それが皆、突然にシンとして
しまったのであつた。

「……何じやったろかい。今の声は……」

「ケダモノじやろか」

「鳥じやろか」

「猿と人間と合の子のような……」

「……春先に鶇もずは啼なかん筈じやが……」

皆、その声の方向に顔を向けて耳を澄ました。二間の床の間に探幽しんゆうの神農様と、松と竹の三幅さんぷく対ついで。その前に新郎の当主甘川

澄夫と、新婦の初枝。その右の下手に新郎の親代りの村長夫婦。

その向い側には嫁女よめじよの実父で、骨董品然と瘦やせこけた山羊鬚やぎひげの

頓野とんの羊伯と、その後妻の肥った老人。仲人役の郡医師会長、栗野

医学博士夫妻は、流石さすがにスッキリしたフロックコートに丸鬚まるまげ紋

服で、西日にしびの一パイに当つた縁側の障子しょうじの前に坐つていた。その他、村役場員、駐在所員、区長、消防頭がしら、青年会長、同幹事と
いったような、村でも八釜やかましい老若が一ダンスばかり下座しもざに頑張
つて、所狭しと並んだ田舎料理を盛んにパク付いては、氏神様か
ら借りて来た五合、一升、一升五合入の三組の大盃を廻わしてい
る。皆相当酔つているとはいうものの、まだ、ほんの序の口とい
つてもいい座敷であつた。

縁側の障子しょうじ際に坐つている仲人役の栗野博士夫妻は最前から
頻しきりに氣を揉もんで、新郎新婦に席はすを外はずさせようとしていたが、田
舎の風俗に慣れない新郎の澄夫が、モジモジしている癖にナカナ
カ立ちそうになかつた。やっと立上りそうな腰構えになると又も、

盃を頂ちようだい戴たいに来る者がいるので又も尻を落付けなければならなかつた。そうして、やつと盃が絶えた機会を見計みはからつて本気に立上ろうとしたところへ、今一度前と違つた奇怪な叫び声が聞こえたので、又もペタリと腰を卸おろしたのであつた。

「アワアワアワ……エベエベ……エベ……」

「何じやい。アレ唾おしヤンの声じやないかい」

「唾ヤンの非人が何か貰いに来とるんじやろ」

「ウン。お玄関の方角じや」

「ああ、ビックリした。俺はまた生きた猿の皮を剥はぎよるのかと
思つた」

「……シツ……猿ナンチ事云うなよ」

そんな会話を打消すように末席から一人の巨漢が立上つて来た。「なあ花婿どん。イヤサ若先生。花嫁御はなよめごはシツカリあんたに惚れて御座るばい」

そう云ううちに新郎の前へ一升入の大盃を差突けたのはこの村の助役で、村一番の大酒飲の黒山伝六郎であつた。見るからに血色のいい禿はげあたま頭の大入道で、澄夫の膳の向うに大胡座おおあぐらをかいた武者振は堂々たるものであつたが、袴の腰板を尻の下に敷いてるので、花嫁の初枝が気が附くと真赤になつて下を向いた。澄夫は恭しく大盃うやうやを押し戴おしいただいたが、伝六郎ありあが在合う熱爛あつかんを丸三本分逆さかさま様にしたので、飲み悩んだらしく下に置いて口を拭いた。

伝六郎は両脇を張つて眼を据えた。座敷中に響き渡る野のてんごえ天声を出した。

「なあ若先生。イヤサ澄夫先生。惚れとるのは花嫁御ばかりじゃない。なあ。村中の娘が総体に惚れとる。俺でも惚れとる。なあ。この村で初めての学士様じゃもの。しかも優等の銀時計様ちうたら日本にたった一人じゃもの……なあ。学問ばかりじゃない。テニスとかペニスとかいうものは学校でも一番のチャンポンとかチンポンとかいう位じゃげな」

仲人の郡医師会長夫妻と、頓野老夫婦と、新郎新婦が、腹を抱えて笑い出した。下座の方の若い連中が又続いて大声でゲラゲラ笑い初めたので、伝六郎はその方に入道首を捻ねじ向けて舌なめず

りをした。

「……何かい。何が可笑おかしかい。俺の英語が何が可笑おかしい。まだまだ知つとるぞ畜生。なあ頓野先生。そうじやろがなあ。男ぶりチウタならトーキー活動のロイドよりも、まつとまつとええ男じやしなあ。阪ばんつま妻でも龍之介でも追付おいつかん。トーキー及ばんチウ言葉は、これから初まったゲナ……ええ。笑うな笑うな。貴様達はトーキー活動ちうものをば見た事があるか。あるめえが。この世間知らずの山猿どもが。キングコングの垂たれ粕かすどもが……」

「アハハハ……もうわかつたわかつた。もう止めてくれ給え伝六君。腹の皮が振よじ切れる。アハハハ……」

「オホホホホホホ」

「まあ、そう云わつしやるな。その盃をばツーツと一つ片付けさつしやい。なあ若先生。俺あ要らん事は一つも云いよらん。皆に云うて聞かせよるとこじや。なあ……若先生は村でタツタ一人のお医者様じや。しかしこげな山の中の素寒貧村には過ぎた学士様じや。先代の仲伯先生も云うちや濟まんが、学校は出ちや御座らん漢方の先生じや。今度の医師会長のお世話で、隣村の頓野先生のお嬢さん……しかも女学校をば一番で卒業さつしやつたサイエンス……ええ……何が可笑しいか。馬鹿ア。ナニイ……サイエ
ン？ サイエンが本真ほんまチウのか……馬鹿あ。へゲタレエ。スの字が附くと附かぬだけの違いじやないか。ウグイスとウグイ……カマスとカマ……ナニイ大違いじやあ……大違いじやとも。サイエ

ンスの方がサイエンよりもヨツポド上等じゃ。問題になるけえ。上等の証拠にコレ程の別嬪べっぴんさんが日本中に在ると思うか。なあ医師会長さん。サイエンスちうのは別嬪さんの事だっしょう。西洋の小野の小町というてみたような……へエへエ。それみろ。俺の英語は本物じゃ。よう聞いとけ。ロイドちうのは色男の事ぞ。舶来なりひらの業平なりひらさんの事ぞ。セルロイドと間違えるな。その日本の業平さんと、小野小町とこの村で結婚さっしやる。新式の病院を開業さっしやる。お蔭で村の者が一人残らず長生きする。なあ……これ位芽出度めでたい事は無いなあ医師会長さん。死んだ先生も喜んで御座ろう」

伝六郎は床の間の上に並んで架かかっている二枚の額を見上げた。

古びた金縁の中に極めて下手な油絵の老夫婦の和服姿が乾涸ひからびたままニコニコしていた。

「ああ。喜んで御座る喜んで御座る。なあ老先生。もう絵になつて終しもうて御座るけんどなあ老先生。あなた方御夫婦はこの村の生いのち命の親様じやった。四十年この村に御奉公しとる私がよう知つとる。御恩は忘れまつせんぞえ。決して決して忘れませんぞえ……なあ。せめて今年と半年ばかり生かいておきたかつたなあ。今日というきようこの席へ座らせたかつたなあ。若先生御夫婦には、この伝六が附いとるといって安心させたかつたなあ。今までの御恩報じに……」

伝六郎の声が次第に上釣うわすつて涙声になって来た。満場ただ伝六

郎の一人舞台になつてサインとしかけているところへ、縁側の障子の西日の前に一人のこおんな小女の影法師がチヨコチヨコと出て来てひざまず跪いた。障子を細目に隙すかして眩まぶしい西日を覗のぞかせた。

仲人の医師会長栗野博士が、その障子の隙間に胡麻塩頭ごましおを寄せ、少女の囁ささやきを聞く二三度軽くうなずいて立上つた。その後から博士夫人が続いて立上ると、見送りのつもりであろう新郎新婦が続いて立上つた。

「イヤ、宜よろしい」

と栗野博士が振返つて手を振つた。新婦の母親の頓野老夫人も、ちよつと中腰になつて押しめにかかったが、新夫婦が強いて行くうとするのを見た頓野老人が、山羊鬚しごを扱しごいて老夫人を押止めた。

小声で囁いた。

「婆さん。留めるな留めるな。もう良えもう良え。立たしとけ立たしとけ。こげな式の時には見送りに立たぬものと昔からなつとるが、今の若い者は流儀が違うでう。心配せんでも宜えわい」
床の間の前では話の腰を折られて唾然となつた伝六郎が、新郎の残して行つた大盃に気が付くと、

「勿体ない。お爛が冷める」

と云つて両手で抱え上げながら顔を近付けてグイグイと一息に飲み初めたので、見ていた下座の連中がゲラゲラ笑い出した。

玄関に近い中廊下の暗がりまで来ると、栗野博士がニコニコ顔

で新夫婦を振返った。

「イヤ。これは恐縮でした。……実は玄関に妙な患者が来たという話でな。あんた方は今日は、そげな者を相手にされん方が宜えと思ふだけに、私が立って来ましたのじやが」

「ハツ。恐れ入ります。そんな事まで先生を煩わしましては……」

新郎の態度と言葉が、如何にも秀才らしくテキパキとしているのを、背後から花嫁の初枝が惚ればれと見上げていた。栗野博士はそれに気付きながら気付かぬふりをしていた。

「いや。実はなあ。その患者が精神病者らしいでなあ」

「エツ……キチガイ……」

「そうじゃ。玄関に坐って動かぬと云うて来たでな。今日だけは

私に委せておきなさい。まだ時間はチツト早いけれども、ちようど良え潮えしおどき時じやけにモウこのまま、離座敷はなれに引取った方がよろうと思うが……あんな正覚坊連中でもアンタ方が正座に坐つると、席が改まつて飲めんでな。ハハハ……」

「……ハイ……」

「私たちもアトから離座敷はなれへチヨツト行きますけに、お二人で茶でも飲んで待つておんなさい。今一つ式がありますでな」

「……ハ……ハイ……」

新郎新婦は狭い、暗い処で折重なるようにお辞儀をした。そのままに立って見送っていた。

玄関の夕ゆうやみ暗の中をズウーツと遠くの門前の国道まで白砂を撒まいて掃き清めてある。その左右の青々とした、新しい四よつめがき目垣の内外には邸内一面の巴旦杏はたんきようと白桃と、梨の花が、雪のように散りこぼれている。その玄関に打ち違えた国旗と青年会旗の下に、男とも女とも附かぬ奇妙な恰かつこう好の人間が、両手を支ついて土下座している。

頭は蓬ほうほう々と渦巻き縮れて、火を付けたら燃え上りそうである。白木綿に朱印をベタベタと捺おした巡礼の笈おいずり摺すりを素肌すみに引っかけて、腰こしから下に色々ボロ布片きれを継つ合わせた垢あかぐろ黒い、大きな風呂敷ふし様のものようを腰巻こしのように捲まき付けている恰好かつこうを見ると、どうやら若い女らしい。全体に赤黒く日に焼けてはいるが肌目きめの細かい、

丸々とした肉付の両頬から首筋へかけて、お白粉しろいのつもりであるう灰色の泥をコテコテと塗付けている中から、切目の長い眦めじりと、赤い唇と、白い歯を光らして、無邪気に笑っている恰好はグロテスクこの上もない。

今しも台所から出て来たこの家の下男の一作が、赤飯せきはんの握にぎり飯めしを一個遣つて追払おうとするのを、女はイキナリ土の上に払い落して、大きく膨ぼうちよう脹はらした自分の下腹部したはらを指しながら、頭を左右に振った。獣けだものとも鳥とも附かぬ奇妙な声を振絞ふりしぼった。

「アワアワアワアワアワ。エベエベエベエベ」

「コン畜生。唾女おしやんの癖にケチを附けに来おつたな。コレ行かんか。殺すぞ」

一作が薪割用の斧おのを振上げて見せると、唾女おしおんなは、両手を合わせて拝みながら、蓬々たる頭を左右に振立てた。下腹部したはらを撫でて見せながら今一度叫んだ。

「エベ……エベ……エベエベエベ」

その時に栗野博士夫婦が玄関へ出て来た。

「コレコレ。乱暴な事をしちや不可ん。穏やかにして追返さんと
い
か
不可ん」

唾女が急に向直つて栗野博士のフロック姿に両手を合わせた。
下腹部したはらを指して奇声を発し続けた。

「何だ。妊娠しとるじゃないか」

一作が手拭を肩から卸した。斧を杖に突いてペコペコした。

「へエへエ。これは先生。この唾女おしやんはモトこの裏山の跛爺ちんばじいの娘で、あそこの名主どんの空土蔵あきどぞうに住んでおった者で御座いますか……」

「フウム。まだ若い娘じやな爺さん」

「へエ。幾歳いくつになりますか存じませんが。へエ。去年の夏の末頃までこの裏山に住んでおりました、父親の跛爺の門八は、村役場の走り使いや、避病院ひびょういんの番人など致しておりましたが……」

「フーム。村の厄介者じやったのか」

「へエ。まあ云うて見ればソレ位の人間で御座いましたが、それが今年の秋口になりますと大切な娘のこの唾女おしやんが、どこかへ姿を隠しましたそうで、門八爺は跛引き引き村の内外を探しまわっ

ておりますうちに、あの土蔵の中で首を縊くつて死んでおりました事が、程経てわかりましたので大騒動になりましたな」

「ウムウム」

「それから後、この唾おしやん女の姿を見た者は一人も居りませんので……へエ……」

「ふうむ。誰が逃がいたのかわからんのか」

「へエ。それがで御座います。御覧の通り唾おしむすめ娘めの上に色情いろきち狂がいで、あの裏山の中の土蔵の二階窓から、山行の若い者の姿を

見かけますと手招きをしたり、アラレもない身振をして見せたり致しますので、跛しっかりの門八爺じいが外に出る時には、必ず喰物を内に残あいて、外から厳しっかり重と締りをしておったそうで御座います。それ

でも門八が帰りがけには、途^{みちなか}中で拾うた赤い布片^{きれ}なぞを持って帰つてやりますとこの花子^め奴が……この娘の名前で御座います……コイツが有頂天も無う喜んでおりましたそうで、その喜びようが、あんまりイジラシサに門八爺が時々、なけなしの錢をハタいて、安物の練^{ねりおしろい}白粉や、口紅を買うて帰つてやったとか……やらぬとか……まことに可哀相とも何とも申^{もうしよう}様の無い哀れな親娘^{おやこ}で御座いましたが」

「……まあ……」と博士夫人がタメ息をして眼をしばたいた。

「ふうむ。してみると誰かこの女にイタズラをした村の青年^{わかて}が、その土蔵^{くら}の戸前を開けてやったものかな」

「へエ。そうかも知れませぬが、跛の門八が戸締を忘れたんかも

知れませぬ。だいぶ耄碌もうろくしておりましたで……それで娘に逃げられたのを苦に病んで、行末の楽しみが無いようになりましたで、首を吊ったのではないかと皆申しておりましたが」

「うむ。そうかも知れんとう。つまりこの娘を逃がいた奴が、門八爺を殺いたようなもんじゃ」

「へエ。まあ云うて見ればそげな事で……」

「しかし、それから最早もう、かれこれ一年近うなつとるが、どこに隠れていたものかなあこの女は……」

「それがへエ。やつぱりどこか遠い処を、当てもなしに非人してまわりよりまする中うちに、誰やらわからん×××を宿して、久し振りに父親の門八爺が恋しうなりましたので、故郷へ帰って来ます

と、あの裏山の土蔵は壊とけてアトカタも御座いませんで、途方に暮れておりまするところへ、コチラ様の前を通りかかって、御厄介になりに来たのではないかと、こう思いますが……」

「ふうん。併しかし物を遣つても要らんチウし、自分の腹を指ゆびさいて何やら云いよるではないか」

「へエ。もう産み月で痛み出して居るかも知れませんがなあ。ちようどこの村から姿を隠した時分から数とつきえますと十月ぐらい。……そうとすれば孕はらませた者は、この村の青年かも知れませんが……へへへ……」

「うむ。困った奴じやのう」

「何せい相手が唾おしやん女で、おまけの上にキチガイと来ております

けに、何が何やらわかつたものでは御座いません」

「しかしここが医者の家チウ事は、わかつとる訳じやな」

「さあ。わかつておりますか知らん。オイオイ花チヤン。ここ痛いけん」

一作爺が自分の腹を指して見せながら、おしおんな 唾女の顔を覗き込んだ。

しかし唾女のお花は答えなかつた。最前からの二人の問答を、

自分の事と察しているらしく、無邪気な、真剣な眼付で二人の顔を代る代る見比べていたが、そのうちに、栗野博士夫妻の背後から、物珍らしそうに覗いている新郎新婦の中でも、先に立っている新郎澄夫の青白い顔に気が付くと、お花は見る見る眼を丸くして口をポカンと開いた。泥だらけの手足を躍らして小犬のように

跳ね上ると、玄関の式台へ泥足のまま駈け上つて、栗野博士を突^つ除^きけながら、澄夫の袴^{はかま}腰^{ごし}にシツカリと抱き付いた。同時に「アツ」と小さな声を立てた花嫁の初枝を、背後から抱きかかえるようにして栗野夫人が、廊下の奥の方へ連れ込んで行つた。

澄夫はハツと度を失つた。花嫁の方を振返る間もなく、唾女の両手を払い除^のけて飛退^{とび}こうとしたが、間に合わなかつた。ガツシリと帯際を掴んだ女の両腕を、そのまま逆にガツシリと掴み締めると、眼を真白く剥^むき出し、舌をダラリと垂らした。そうして気を落付けようとしているのであろう。周章^{あわ}ててその舌を嚙^{のみ}込み嚙^こ込み眼をパチパチさせた。その顔を下から見上げた唾女はサモサモ嬉しそうに笑つた。

「ケケケ……ケケケケケケケケケ……」

若様らしい上品な澄夫の顔が、その笑い声につれて見る見る皺しわだらけの鬼婆のような、又は髪毛を逆立てた青鬼のような表情に変わった。反対に澄夫の方が発狂しているかのように見えた。

栗野博士も一作爺も、澄夫と一いっしょ所に度を失った。

「コレコレ……退のかんか……」

「コラツ……コン外道げどう……」

と二人が声を揃えて怒鳴り付けるうちに一作が、女の襟首へ手をかけると、古びた笈おいずり摺せぬいの背縫せぬいと脇縫わきぬいが、同時にビリビリと引離れかかった。その手を非常な力で跳ね除のけながら唾女は、涙をボロボロと流した。澄夫の顔を指し、又自分の腹部を指し示し

て、情なきさそうな奇声を発しながらオドオドと三人の顔を見廻わした。

「エベエベ……アワアワ。アワアワアワ……」

澄夫は絶体絶命の表情をした。唇を血の出る程噛んで、肩をキリキリと逆立たした。

「イヨオ。これは芽出度い」

という頓とんきよ狂な声がして、澄夫の背後の廊下から伝六郎が躍おどり

出して来た。又も大盃を呷あおり付けて、素敵に酔払っているらし

く、吉角力きちがずもうの大関を取ったという双肌もうはだを脱いで、素晴らしい

筋肉美を露出している。

「ヨオヨオ。これは芽出度い、婚礼の門口に孕み女とは芽出度い、イヤア……汝^{なれ}あ裏山のお花坊じやねえかい。こん外道人間。片輪者とはいいながら親の死んだ事も知らじい、どこをウ口付きおったかい。どこの×××××をば孕^{はら}うで来おったかい。ええ。コレ……コレ……」

と云ううちにお花の両脇の下に手を入れて軽々と抱き上げた。お花は引離されまいとする一生懸命さに、片手で色々な手真似をしいしい、線香花火のように暴れ出した。縊^{ぼろ}縊^き布片の腰巻が脱け落ちそうになったまま叫び続けた。

「アワアワアワ。エベエベエベエ。ギヤアギヤアギヤアギヤアギヤアギヤ」

「アハハハ、わかったわかった。感心感心。ウムウム。エベエベエベじや。ベツベツ。臭いなあ貴様は……アハハハ。わかったわかった。つまり近いうちに子供が生まれるけに、この若先生に頼んで生ませてもらいたいチウのか……ウムウム。なかなか良うわかつとる。エベエベ。感心感心」

「エベエベエベエベ」

「ええ。泣くな泣くな。縁起の悪い。ウムウム。わかったわかったそうかそうか。よしよし。俺が頼うでやる頼うでやる。柔順おとなしうしとれ」

「エベエベエベ」

「なあ若先生。たまげ魂消なさる事はない。これあ芽出度い事ですばい。

たとい精神きち異状い者じやろが、唾女じやろが何じやろが、これあ福の神様ですばい。何も知らじい来た、今日のお祝いの御使つか姫しめですばい。何とかして物置の隅でも何でも結構ですけに、置いてやっして下さいませや。本来ならば役場で世話せにやならぬところですけれど、この村にや設備が御座いせんけに、なあ先生。功德で御座いますけに……きようのお祝いに来た人間なら何かの因縁と申うて、なあ若先生……これ位、芽出度い事は御座いまっせんばい」

「……………」

「どうぞもし……どうぞ若先生。先生の病院はこの功德の評判だけでも大繁だいはん昌じょうですばい。アハハ……なあ花坊。祝い芽出度の

若松様よ……トナ……さあ。花ちゃん。この手を離しなさい。柔お順となしうこの帯を離しなさい。この若先生が診みてやると仰おっしや言るけに……」

もろはだぬぎ双肌脱の伝六郎が、音に聞こえた強力で、お花の腕を挽もぎ離そうとする度に、帯際を掴まれている澄夫は式台の上でヨロヨロとよろめいた。

「コレコレ。離せと云うたら。恐ろしい力じゃ。コレコレここ、離しおれと云うたら……云うたて聞こえんけに往生するのう。袴の紐が切れるてや。ええ若先生。この袴と帯を解かつしやれ。アトは私が引受けますけに……」

今にも気絶しそうに生汗を滴たらしながら唾女の瞳を一心に凝視

していた澄夫は、この時やつと気を取直したらしく、伝六郎の顔を見て真赤になった。暗涙を浮かめた瞳で背後の栗野博士を振り返ると、すこしばかり頭を下げた。やつとの思いで唇をわななかし
た。

「誠に……恐れ入りますが、モルフィンを少しばかり、お願い出来
ますまいか……一プロ……ぐらいで結構ですが……」

「オット。モルヒネなら失礼ながら私が作りましょう。長らくこの
病院の留守番をさせられて、案内を知っておりますので……」
栗野博士の背後から頓野老人が山羊鬚を突出した。

「二番目の棚の右の端で御座ったの」

と云ううちに自分で二つ三つうなずきながら、大仰に袴のりよう両

岨そわを取った頓野老人は、玄関脇の薬局にヨチヨチと走り込んだ。ホントウにこの家の案内を知っているらしく、突当りの薬戸ガラス棚の硝子戸を開いて、旧式の黒柿製の秘薬ばこ管を取出して調薬棚の上に置いた。その中からつま掴み出した小型の注射器に蒸溜水を七分目ほど入れて、箱の片隅の小さな薬瓶の中の白い粉を、薬包紙の上おと零すと、指の先で無雑作に掴み取りながら注射器の中へポロポロとヒネリ込んだ。活かつせん栓と針を手早く添えて、中味の液体をソー式に動かすと、薬の残りを箱の中の瓶に返して、右手にアルコールをひた涵した脱脂綿と、万創膏ばんそうこうを持ちながら薬局を出て来た。「ヘツヘツへ。わしは元来胆たん石せきでなあ。飲み過ぎると胸が痛み出す。痛み出すと自分でこの注射をやって眠るのが楽しみでなあ。

ヒツヒツ。この見量なら下手な天秤よりもヨツポドたしかじや。
生命いのちがけの練習しとるけになあ。……さあ作つて来ました。六分
ゲレンの一じやからちようど一プロの一瓦グラムじや。相手が相手じや
けに相当利きまっしよう。さあ……」

澄夫は、こうした頓野老人の自慢の離れ業わざを格別、驚いた様子
もなく受取つた。無造作に狂女の右腕を捕まえて注射した。

唾女のお花は痛がらなかつた。却かえつて何となく嬉しそうに注射器
と澄夫の顔を見比べてニコニコしていたが、注射が済むと、何と
思つたか急に溫柔おとなしく手を離して、伝六郎と一作に手を引かれな
がら、縋ぼろ縋の腰巻を引擦り引擦り立ち上つた。もう真暗になつた
軒下を、裏手の物置納屋の処へ来た。

納屋の前まで来た時、彼女はモウ眠気を感じているらしかった。先に立つた一作が造つてくれた古藁と、古莫蔭ごごぎの寢床へコロリと横になつて眼を閉じた。大きな腹の上に左手を投げかけると、もうスヤスヤと寢息を立てていた。

嘗かつて殿様のお鷹野たかのの時に、御休息所になつたという十畳はなれの離座敷ざしきは、障子ざしきが新しく張換はりかえられ、床の間に古流の松竹いが生けられて、寂さびの深い重代の金屏風きんびょうぶが二枚建てまわしてある。その中に輪違いの紋と、墨絵の馬を染出そめだした縮緬ちりめんの大夜具が高々と敷かれて、昔風の紫房むらさきぶどうの括くくり枕まくらを寢床の上に、金房の附いた朱塗の高枕を、枕元かたそばの片傍かたそばに置いてあつた。

その枕元に近い如じよりん鱗の長火鉢の上に架かかつた鉄瓶からシユンシユンと湯気が立つていた。

仲人栗野博士から、唾女に対する伝六郎の口上を、身振り手真似、こわいろ声色入りで聞かされた花嫁の初枝は、たしなみも忘れて、声を立てながら笑い入った。そうして、

「まあまあ大事にしてやんなさい。医者の人気というものはコンな事から立つものじゃけに……そのうちに私が県庁へ手続きをして行路病人の収容所へ入れて上げるけに……」

という博士の話を聞いて初枝はスツカリ安心したらしく、両手を突いて頭を下げながらホツとタメ息をしてみた。しかし新郎の澄夫は両手をキチンと膝に置いてしなだ頸低れたまま、ニンガリもせず

に謹聴していた。

それから博士夫妻の介添かいぞえで、床とこ盃さかずきの式が済んで二人きりになると、最前から憂鬱ゆううつな顔をし続けていた澄夫は、無雑作に

……塗枕と反対側の床の間の方を向いて、両腕を組んで、両脚を縮めたまま凝然じじつと眼を閉じた。

澄夫の着物を畳んで、衣桁いこうにかけて花嫁の初枝は、

……透きとおるような声で、

「おやすみ遊ばせ」

とハツキリ云うと、石のように頬を固こわばらせたまま冷然と眼を

閉じている……………、出来るだけ静かに……………。

しかし澄夫は動かなかつた。呼吸をしているのか、どうかすら判然わからない位凝然じつと静まり返っていた。初枝も天鷲絨びろうどの夜具えりの襟えりをソツト引上げて、水々しい高島田の鬘たぼを気にしいしい白い額と、青い眉を蔽うた。

白湯さゆの音がシンシンと部屋の中に満ち満ちた。

新郎——澄夫は、その白湯の音に耳を澄ましながら、物置の中に寝ている唾女の事ばかりを一心に考え続けていた。

それは去年の八月の末の事であつた。

暑中休暇の数十日を田舎の自宅で潰つぶして、やつとの事で卒業論文を書上げた彼は、正午ひる下りの晴れ渡つた空の下を、裏山の方へ散歩に出かけた。

彼の両親はもう、三個月ばかり前に老病で相前後して死んでいた。後の医業しごとは彼の父の友人で、伴せがれに跡目を譲つて隠居している隣村の頓野老人が来て、引受けてくれていたので、彼はただ一生懸命に勉強して大学を卒業するばかりであつた。しかも天性じゆう柔りよう良りようで、頭のいい彼は、各教授から可愛がられていたし、自分自身にも首席で卒業し得る自信を十分に持っていた。卒業論文が出来れば、もう心配な事は一つも無いといつてよかつた。

彼は完全な両親の愛の中で育ったせいであろう。庭球以外には何一つ道楽らしい道楽を持っていなかった。もちろん女なんかには、こつちから恐れて近付き得ないような所謂、聖人型だったので、二十四歳の大学卒業間際まで、完全な童貞の生活を送っていた。それは大学時代の一つの秘密の誇りでもあった。

だから来年に近附いて来た結婚に対する彼の期待は、彼の極めて健康な、どちらかといえば脂肪肥りの全身に満ち満ちていた。田圃道でスレ違いさまにお辞儀をして行く村の娘の髪の毛の臭気を嗅いでも、彼は烈しいインスピレーションみたようなものにとたれて眼がクラクラとする位であった。

だから、そんなものに出会うのを恐れた彼はこの時にも、わざ

と傍道わきみちへ外れて、彼の家の背後の山蔭に盛上った鎮守の森の中へフラフラと歩み入った。そのヒイヤリとした日蔭の木の間こまを横切つて行く、白い蝶の姿を見ても、又は、はるか向うの鉄道線路を匂はい登つて行く三毛猫の、しなやかな身体からだつき附を見ただけでも、云い知れぬ神秘的な悩みに全身を疼うずかせつつ、鎮守の森の行詰まりの細道を、降るような蟬の声に送られながら、裏山の方へ登つて行つた。

たちま 忽ち、たまらない草イキレと、木蔭の青葉に蒸むれ返る太陽の芳香においが、おそろしい女の体臭のように彼を引包ひきつつんだ。行けば行くほどその青臭い、物狂おしい太陽の香気が高まつて来た。彼は窒息しそうになつた。

むろん医学生である彼は、その息苦しくなつて来る官能の悩みが、どこから生まれて来るかを知つていた。同時にその悩ましきから解放され得る或る………誘惑を、たまらなく気附いているのであつた。だから彼は、現在、蒸れ返るような青葉の芳香の中で、その誘惑を最高潮に感じたトタンに、自分のフツクリと白い手の甲に……附いた。汗じみた、甘あまから鹹あまからい手の甲の皮膚をシツカリと………て気を散らそうと試みた………が………しかしその手の甲の肉から湧き起る痛みすらも、一種のタマラない………のカクテルとなつて彼の全身に渦巻き伝わり、狂いめぐるのであつた。

彼は突然に眼を閉じ、唇を嚙締めて、雑木藪の中を盲滅めくらめつぼ法うに驀進ばくしんし初めた。あたかも背後から追かけて来る何かの怖ろしい誘惑から逃れようとするかのように、又は、それが当然、意志の薄弱な彼が、責罰として受けねばならぬ苦行であるかのよううに、袷衣あわせぎぬ一枚の全身にチクチク刺さる松や竹の枝、露あらわなずね向う脛から内股をガリガリと引つ掻き突刺す草や木の刺針の行列の痛さを構わずに、盲滅法に前進した。全身汗にまみれて、息を切らした。そうして胸が苦しくなつて、眼がまわりそうになつて来た時、突然に、前を遮さえぎる雑木藪の抵抗を感じなくなつたので、彼はヒョロヒョロとよろめいて立佇たちどまつた。

彼はまだ眼を閉じていた。はだかつた胸と、露あらわになつた両脚

を吹く涼しい風を感じながら、遠く近くから疎まばらに聞こえて来るツクツク法師の声に耳を傾けていた。山やまじゆう中の静けさがヒシヒシと身に泌しみみ透るのを感じていた。

突然、鳥とも獣けだものとも附かぬ奇妙な声がケタタマシク彼を驚ろかした。

「ケケケケケケケケケケ……」

彼はビツクリして眼を見開いた。彼は山の中の空地の一端たたずに佇たたずんでいたのであった。

そこは巨大な楠や榎えんに囲まれた丘陵の上の空地であった。この村の昔の名主の屋敷趾あとで、かなり広い平地一面に低い小笹がザワザワと生え覆かぶさっている。その向うの片隅に屋根が草だらけに

なつて、白壁がボロボロになつた土蔵が一戸前、朽ち残つていた。その倉庫の二階の櫺子窓れんじから白い手が出て一心に彼をさし招いている。その手の陰に、凄い程白く塗つた若い女の顔と、気味の悪い程赤い唇と、神々ことうごうしいくらい純真に輝く瞳と、額に乱れかかった夥おびただしい髪の毛が見えた。それが窓から挿さし込む烈しい光線に白い歯を美しく輝やかした。

「……キキキ……ヒヒヒ……ケケケ……」

その幽霊のように凄い美しくしさ……なまめかしさ。眼も眩くらむほどの魅惑……白昼の妖精……。

彼は骨の髄までゾーツとしながら前後左右を見まわした。

彼の頭の上には真夏の青空がシーンと澄み渡つて蟬の声さえ途と

絶え途絶えている。彼を見守っているものは、空地の四方を囲む樹々の幹ばかりである。

彼は全身を石のように固くした。静かに笹原を分けて土蔵の方へ近付いた。

窓の顔が今一度嬉しそうにキキと笑った。すぐに手を引込めて、窓際から離れて、下へ降りて行く気はいであつた。

土蔵の戸前には簡単な引っかけ輪鉄が引つかかつて、タヨリない枯枝が一本挿し込んで在るキリであつた。それを引抜くと同時に内側で、落棧を上げる音がコトリとした。彼は眼が眩んだ。呼吸を喘はずませながら重い板戸をゴトリゴトリと開けた。

「キキキキキキキキ……」

そこまで考え続けて来ると彼は寢床の中で一層身体を引縮めた。背後にスヤスヤと睡っているらしい花嫁……初枝の寢息を鉄瓶の湯気ゆけの音と一所に聞きながらなおも考え続けた。

……それは彼の生れて初めての過失であると同時に、彼の良心の最後の致命傷であつた。

その後、その重大な過失の相手である唾女のお花がゆくえ行衛不明となり、そのお花の言葉を理解し得るタツタ一人の父親、門八が、彼女を無くした悲しみの余りに首をくく縊つて死んだと聞いた時には彼は、正直のところホツとしたものであつた。最早もはや、天地の間に

彼の秘密を知っている者は一人も無い。この僅かな秘密の記憶一つを、彼自身がキレイに忘れて終しまいさえすれば、彼は今まで通りの完全無欠の童貞……絶対無垢の青年として評判の美人……初枝を娶めとる事が出来るのだ。

「おお神様。神様。どうぞこの秘密をお守り下さい。この私の罪をお忘れ下さい。もう決して……決して二度とコンナ事をしませんから……」

と彼は人知れず物蔭で、手を合わせた事さえ在ったくらい、そうした思い出そのものを恐れ、戦おのき、後悔していた。そうして彼は幸福にも一日一日と日を送って行くうちに、もう殆んど、そうした良心の傷手いたでを忘れかけていた。彼は彼自身の社会に対する一

切の野心と慾望を擲なげうつて、美人の妻と一所に田舎に埋もれるとい
う、涙ぐましいほどに甘美な夢を、安心して、夜となく昼となく
逐おい続けているところであつた。

その甘美な夢が、今、無残むざんにもタタキ破られてしまったのであ
つた。

時も時……折も折……忘れるともなく忘れて、消えるともなく
消え失せていた彼の過去の微かすかな秘密が、突然に、何千、何万、
何億倍された恐ろしい現実となつて彼の眼の前に出現し、切迫し
て来たのであつた。

見るも浅ましい孕はらみ女。物を得えい言わぬ聾唾者。それが口にこそ
云い得ね、手真似にこそ出し得ね、正当な彼の妻である事を現実

に立証し、要求すべく立現われて来たのであった。それは、ほかの人間たちには絶対にわからない、ただ彼にだけ理解される恐ろしい、不可抗的な復讐に相違なかった。

……もしも彼女がタツタ一言でも物を云い得たら……いないな否々。

一人でも彼女の手真似を正当に理解し得る者が居たら……そうして、それだけの恐怖、不安、戦慄を、今日の日に限ってこの家の玄関に持込んで来たのが、彼女の意識的な計画であつたら……。

……それがさながらに悪魔の智慧ちえで計劃された復讐のように残酷てきびな、手酷てきびしい時機と場面を選んで来た事はトテモ偶然と思えない。白痴の一つ記憶式おぼえの一念で、云わず語らずのうちに彼女がそうしたところを狙って、時機を待っていたかのようにも思える。

又は全然そうでないかのようにも思える……。

……そうした判断の不可能な事を考え合せると、その恐怖、不安、戦慄が更に更に神秘数層倍されて来るのであった。

彼は思わず今一度ゾツとして身体を縮めた。パツチリと眼を見開いて、静かに振返つてみると花嫁の初枝は、夜具の襟に顔を埋めてスヤスヤと眠っているようである。

彼は極めて注意深くソロソロと夜具を脱け出した。枕元の障子をすこしずつすこしずつ音を立てないように開けて廊下に出て、足音をぬす盗み盗み渡わたり殿どの伝いに母屋おもやの様子を窺った。

家中が森閑しんかんと寝静まつて給仕人の足音も途絶えている。勝手の方の灯も消えてしまつて、ただ奥座敷に寝ているらしい伝六郎

の寝言とも歌とも附かぬグウダラな呆ぼけ声が聞えている……その
 声を聞き聞き彼は真暗な中廊下を抜けて、玄関脇の薬局の扉を開
 いた。

薬局の三方硝子窓ガラスの外は雪のように輝やいていた。西に傾いて
 一段と冴え返った満月に眩しく照らされた巴旦杏はたんきようの花が、鉛色
 の影を大地一面に漂ただよわしていた。

中央の調薬台の前に立った彼は恍惚としてその白い光りに見惚みと
 れていた。そうして今日までに彼が見たり聞いたりした幾多の所い
 わゆる謂成功者、すなわち立志伝中の人々が……如何に残忍な、血も
 涙も無い卑怯な方法をもつて弱者を蹂躪じゆうりんし、踏殺ふみころして来た
 かを聯想し、想起し続けていた。

……俺もその一人にならなければならぬ。否々。もつともつと強い人間にならねばならぬ。貴い俺自身の一生涯……これだけの頭脳と、智識と……この若い血と、肉と、豊かな情緒とをあの見苦しい、淋しい^{さび}廢物同然の唾女の一生と釣換え^{つりか}にしてたまるものか……これは当然の事なのだ、天地自然の理法なのだ。ちつとも恥ずるところはない。咎め^{とが}られるところもない。ただ他人に見咎^{みとが}められさえしなければ……疑われさえしなければいいのだ。ちつとも構わない。何でもない事なのだ。

そんな事を考えまわしているうちに、いつの間にか、雪の光りに包まれたような寒さを感じ初めたので、彼はハツとして吾^{われ}に帰った。

頭のシンは睡ねむくてたまらないのに、意識だけはシャンシャンと冴え返っているような気持で彼は、正面の薬戸棚の抽ひきだし出から小さなカプセルを一個取出した。それから突当りの薬戸棚の硝子戸を開いて、きよう昼間、頓野老人が持出した黒柿の秘薬箱を今一度取出して、調合棚の上に置いた。その中から、やはり今日頓野老人が扱った塩酸モルヒネの小瓶を抓つまみ出して、その中の白い粉末の小量を、月の光りに透かしながらカプセルに落とし込んだが、多過ぎると思つたらしく又、その中の極微量を小瓶の中へ落とし返してからカプセルの蓋をシツカリと蔽おほうた。それから何もかもモト通りに直して、薬戸棚の硝子戸をピッタリと閉じた。

その時に彼の背後の、開あけはな放しにして来た廊下の暗闇で微かな、

深い溜息が聞こえたように思ったので、彼はハツとばかり固くなつた。慌ててカプセルを右手に握り込んだまま、指先走りに廊下に出てみたが、しかしそこには何の人影も無く、真暗な中廊下の向うの、閉め忘れて来た わたりどこの 渡 殿 の入口の片側に、白桃の花が白々と月あかりに見えたので、今度は彼自身が思わず、深いタメ息をさせられた。

彼は彼自身を勇気付けるかのようにタツタ一人で微笑した。悠々と薬局に帰って、小型のビーカーを取上ると常水を六分目程満たした。塩酸モルヒネ入りのカプセルと一所に左手に持って、薬局のスリッパを爪 つまさきぐ 探った。薬局の横の扉の掛金を外 はず して、勝手口の外側に出た。

軒下の暗がり伝いに足音を窺み窺み、台所の角に取付けた新しいコールタ塗ぬりの雨樋あまどいをめぐつて、裏手の風呂場と、納屋の物置ひさしあの廂ひさしあ合あいの下に来た。

そこでは西へ傾いた月が、かなり深い暗がりを作つて、直ぐ横手の白光りする土蔵の壁を、真四角に区切つていた。

彼は絶対に音を立てないように……まだ痲醉まひしているであろう唾女の眼を醒まささないように、用心しいしい納屋の扉の掛金を外した。

……すると……納屋の中の暗がりで、突然にガサガサと藁わらの音がし初めた。たまらない乞食臭い異臭がムウと襲いかかつて来た。

……と思う間もなく獣のように髪を振乱した怪物……逞ましい、
 ……
 ……唾女が飛出して来て、イキナリ彼に抱き付いた。
 心から嬉しそうに笑った。

「キイキイキイ……キキキキキ……」

その鴉もずさながらの声は月夜の建物と、その周囲をめぐる果樹園に響き渡って消え失せた。

彼は一切が破滅したように思った。眼も眩むほど胸がドキンドキンとした。全身にゾーツと生なまあせ汗を掻きながら今一度、静かに左右を振返ってみたが、その彼の怯おびえた視線は、タツタ今通つて来た台所の角の、新しい黒い雨樋の処へピタリと吸い寄せられた。同時に彼の全神経が水晶のように凝固してしまった。

そこには離座敷から、彼の行動を跟けて来たらしい花嫁の初枝の、冴え返った顔が覗いていた。昨夜のままの濃化粧と、口紅のクツキリとした、高島田のきんもとゆい金元結のなま艶めかしい、黒い大きな瞳を一パイに見開いた人形のようなうりざねがお瓜実顔が、月の光りにうきぼ浮彫りされたまま、半分以上雨樋の蔭から覗き出して、彼の姿を一心に凝視しているのであった。

彼はソレを月の光りに照し出された巴旦杏の花の幻覚かと思つた。右手で左右の眼をグイグイと強くコスツて今一度よく見直した。

それは、たしかに花嫁の初枝の顔に相違なかつた。びん鬢のホツレ毛が二三本、横頬に乱れかかっているのが、傾いた月の光りでハ

ツキリと見えた。その二つの黒い瞳が、マトモに此方を凝視したまま大きく、ユツクリと二つばかり瞬またたいたのが見えた。同時に、その真白い頬から大粒の涙の球が、キラリキラリと月の光りを帯びて、土の上に滴したたり落ちるのが見えた。

彼は、彼の足元の大地が、その涙の落ちて行く方向にグングンと傾いて行くように感じた。持っているビーカーを取落しそうになった。

その時に彼に取とりすが継つっているオドロオドロしい姿が、泥だらけの左手をあげて、初枝の顔を指した。勝誇るように笑った。

「ケケケケ……エベエベエベ……キキキキ……」

人形のような高島田の顔が、静かに雨樋の蔭から離れた。長々

と地面に引擦ひきすった燃立つような緋縮緬ひぢりめんの長襦袢ながじゆばんの裾に、白い脛すねと、白い素足かわが交る交る月の光りを反射しいしい、彼の眼の前に近付いて来た。

彼はカプセルを自分の口に入れた。ビーカーの水を……その中にゆらめく月の光りを凝視しつつ……思い切ってガブガブと飲んだ。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年9月24日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

2000年6月21日公開

2006年3月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

笑う唾女

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>